

XV. ● ポスト・モダニズムと人間 (2)

XV-1 僕は人間を探している

○ 犬のディオゲネス (B.C.414(?)~323)

キュニコス (犬儒) 派の哲学者。アンティアネスの弟子 (アンティアネスはソクラテスの弟子)。通貨を偽造してシノペを追放されたといわれる。アテネで彼は酒樽を住まいとし、頭陀袋と杖だけで生活した。自分で息をつめて死んだとも、犬にタコをやっていたら足を食われて死んだとも、タコを生で食ってコレラになって死んだとも伝えられる。

(ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』が伝える犬のディオゲネスのエピソード)

- ※ あるとき彼が「おおい人間どもよ」と叫んだので、人々が集まってくると、彼は杖を振り上げて彼らに迫りながら「ぼくが呼んだのは人間だ」と言った。
- ※ アレクサンドロス大王は、もし自分がアレクサンドロスではなかったとしたら、ディオゲネスであることを望んだであろうと語った。
- ※ 彼がクラネイオンで日向ぼっこをしていたとき、アレクサンドロス大王がやってきて、彼の前に立って「何なりと望みのものを申してみよ」と言った。すると彼は「どうかわたしを日陰におかないでくれ」と答えた。
- ※ 彼は白屋にランプを灯して、「ぼくは人間を探しているのだ」と言った。
- ※ 「君にはディオゲネスはどのような人だと思うか」と訊かれ、プラトンは「狂えるソクラテスだ」と答えた。
- ※ あなたはどこの国の人かと訊ねられると「世界市民 (コスモポリテース) だ」と答えた。
- ※ 「わたしは哲学には向いていません」と言った人に対して「ではなぜ君は生きているのだね、立派に生きるつもりが君にないのだとすれば」と言った。
- ※ 世の中でもっともすばらしいものは何かと訊かれたとき、「何でも言えること (パルレーシアーParrhesia) だ」と答えた。
- ※ 唯一の正しい国家は世界国家であると言っていた。

XV-2 超人

○ フリードリヒ・ニーチェ (1844-1900) ——神の死と超人

【悦ばしき科学】

狂気の人間。——諸君はあの狂気の人間のことを耳にしなかったか、——白屋に堤燈をつけながら、市場を馳けてきて、ひっきりなしに「おれは神を探している！ おれは神を探している！」と叫んだ人間のことを。——市場には折しも、神を信じないひとびとが大勢群がっていたので、たちまち彼はひどい物笑いの種となった。「神さまが行方知れなくなったというのか？」とある者は言った。「神さまが子供のように迷子になったのか？」と他の者は言った。「それとも神さまは隠れん坊をしたのか？ 神さまはおれたちが怖くなったのか？ 神さまは船で出かけたのか？ 移住ときめこんだのか？」——彼らはがやがやわめき立て嘲笑した。狂気の人間は彼らの中にとびこみ、孔のあくほどひとりびとりを睨みつけた。「神がどこへ行ったかって？」、と彼は叫んだ、「おれがお前たちに言ってやる！ おれたちが神を殺したのだ——お前たちとおれがだ！ おれたちはみな神の殺害者なのだ！ だが、どうしてそんなことをやったのか？ どうしておれたちは海を飲みほすことができたんだ？ 地平線をのこらず拭い去る海綿を誰がおれたちに与えたのか？ この地球を太陽から切り離すようなことを何かおれたちはやったのか？ 地球は今どっちへ動いているのだ？ おれたちはどっちへ動いているのだ？ あらゆる太陽から離れ去ってゆくのか？ おれたちは絶えず突き進んでいるのではないか？ それも後方へなのか、側方へなのか、前方へなのか、四方八方へなのか？ 上方と下方がまだあるのか？ おれたちは無限の虚無の中を彷徨するように、さ迷ってゆくのではないか？ 寂寞とした虚空がおれたちに息を吹きつけてくるのではないか？ いよいよ冷たくなっていくのではないか？ たえず夜が、ますます深い夜がやってくるのではないか？ 白屋に堤燈をつけなければならぬのではないか？ 神を埋葬する墓堀人たちのざわめきがまだ何もきこえてこないか？ 神の腐る臭いがまだ何もしてこないか？ ——神だって腐るのだ！ 神は死んだ！ 神は死んだままだ！ それも、おれたちが神を殺したのだ！ 殺害者中の殺害者であるおれたちは、どうやって自分を慰めたらいいのだ？ 世界がこれまでに所有していた最も神聖なものの最も強力なもの、それ

がおれたちの刃で血まみれになって死んだのだ、——おれたちが浴びたこの血を誰が拭いとってくれるのだ？ どんな水でおれたちは体を洗い浄めたいのだ？ どんな贖罪の式典を、どんな聖なる奏楽を、おれたちは案出しなければならなくなるだろうか？ こうした所業の偉大さは、おれたちの手にあまるものではないのか？ それをやれるだけの資格があるとされるには、おれたち自身が神々とならねばならないのではないのか？ これよりも偉大な所業はいまだかつてなかった——そしておれたちのあとに生まれてくるかぎりの者たちは、この所業のおかげで、これまであったどんな歴史よりも一段と高い歴史に踏み込むのだ！」——ここで狂気の人間は口をつぐみ、あらためて聴衆をみやった。聴衆も押し黙り、訝しげに彼を眺めた。ついに彼は手にした堤燈を地面に投げつけたので、堤燈はばらばらに砕け、灯が消えた。「おれは早く来すぎた」、と彼は言った、「まだおれの来る時ではなかった。この怖るべき出来事はなおまだ中途にぐずついている——それはまだ人間どもの耳には達していないのだ。電光と雷鳴には時を要する、星の光も時を要する、所業とてそれがなされた後でさえ人に見られ聞かれるまでには時を要する。この所業は、人間どもにとって、極遠の星よりもさらに遙か遠いものだ——にもかかわらず彼らはこの所業をやってしまったのだ！」——なおひとびとの話では、その同じ日に狂気の人間はあちこちの教会に押し入り、そこで彼の「神の永遠鎮魂弥撒曲」(Requiem aeternam deo) を歌った、ということだ。教会から連れだされて難詰されると、彼はただこう口答えするだけだったそうだ——「これら教会は、神の墓穴にして墓碑でないとしたら、一体なんなのだ？」

- 神を殺害しただけで十分だと思っていた、人間たちへのニーチェの警鐘。神を殺害した人間に訪れようとしている、自分自身の消滅。人間の不在……。
- フーコー、犬のディオゲネス、ニーチェのあいだで交わされた、時空を超えた哲学的対話。人間の概念にまつわる複雑な共鳴。人間の死を宣告するフーコー、神の死を宣告し、かわって人間を超えたものを求めるニーチェ、そして人間を探す犬のディオゲネス。もっとも健全な思考がもっている、ある種の狂気。人間の知性は、どのようにしたら、新たな装いを得て再生するのだろうか。

XV-3 パレーシア、《自由》とは

ギリシアの自由(エレウテリア)の象徴は、イセーゴリア(平等な発言の権利)から、パレーシア(言いたいことを言うこと)へと変わっていく。たんに発言するのではなく、おのれが言いたいことを言うことがいかにむずかしいか。本当に言いたいこと、とはなんだろうか？ それは、借り物ではない、おのれの言葉で、心の底から語る(表現する)ことではないだろうか。

- われわれの生が、それに先立つ権力によって統治・管理されることなく、生の実践=歴史となっていくような、そういう時間を求める。生と歴史とが自然に結びついているような、そうした健康な世界を築くために、われわれは《本当に自分の言いたいことを言うべく、努力せねばならない》。
- 人文学者のわたしは人間を探しつづける。しかし君たちは、古い人間を超えて、未来に踏み出してほしい。新しい人文学を、打ち立ててほしい！